

---

# お菓子

STAYFREE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お菓子

### 【Nコード】

N1018S

### 【作者名】

STAYFREE

### 【あらすじ】

お菓子メーカーをリストラされた男が幼い頃に駄菓子屋へ通った  
想い出から 自分の心を取り戻す

「リストラか……」

こんな時代だ。珍しいことではない。

私は大手菓子メーカーに勤務していた。入社して25年、真面目に働いてきた。商品開発部門に所属をし、いくつかのヒット商品も生み出した。会社への貢献度はそこそこあったはずだ。

入社したばかりの頃は、美味しくて安全なお菓子を作つて、子どもたちを喜ばせてやるんだ。そんな思いを胸に働いていた。

しかし、何故だろう。仕事を失うことは大変なことだが思いのほか冷静な自分がいた。悔しい、悲しいという気持ちが湧いてこない。

自分はいつの間にか仕事に対しての情熱を失ってしまったのだろうか。

子どもの頃、やはりお菓子が好きだった。

毎月、お小遣いをもらうとすぐに50円を握り締め近所の駄菓子屋に行つてお菓子を買った。一度にお小遣いを使うと楽しみがなくなつてしまうので週に1回ぐらいのペースで通つていたと思う。

駄菓子屋のおばちゃんはとても優しい人で、友達とけんかして、落ち込んだ顔でお菓子を買いに行った時に仲直りの方法を教えてくれたり、いじめられて泣きそうな顔で買いに行った時には男の子なんだから強くなりなさいって勇気づけてくれたり。子どもながらに心が癒されていた気がする。

あの駄菓子屋はまだあるのだろうか。

久しぶりだ、この駅の看板を見るのは。

翌日、もう一度あの駄菓子屋のおばちゃんに会いたくて私は約3

0年ぶりに生まれた街へと降り立った。

小学3年生の時に引越して以来の町。もう、おばあちゃんだな。元気だといいいのだけれど。

駅からの町並みはすっかり変わってしまっていた。あの時は新しかったアーケードの屋根もすっかり曇って割れている部分もある。

商店街の景色はグレーのシャッターがしまっている店が多く暗い色合いになっていた。ところどころに空き地もあり、再開発予定地の看板が立っている。

確か豆腐屋の角を曲がって50メートルぐらいの所だったよな。目印となる豆腐屋はやはりシャッターがしまり営業している様子はなかったがかすれた看板の文字に見覚えがあった。

このあたりのはずだけど……、やっぱり無くなっているようだ。肩を落として、来た道を引き返そうと後ろを向いたときだった

「おばあちゃん、僕にもお菓子ちょうだい！」

子どもたちがそう叫んで、私の横を駆け抜けて行った。

もう一度振り返り、子どもたちが走っていた方向を見ると少し腰の曲がったおばあちゃんが台の上にお菓子を並べて子どもたちに配っているようだ。

間違いない。あの駄菓子屋のおばあちゃんだ。

私はためらいながらも、駄菓子屋のおばあちゃん。お菓子を配っているおばあちゃんに近付いていった。

「あの、以前こちらで駄菓子屋を……」

「はい、やっていましたよ。つい最近、閉めることになってしまったのだけだ」

私は来た道の途中にあった空き地の再開発の看板を思い出した。

「子どもたちに配っているのはお店の商品ですか？」

「ええ、返品もできないし捨ててしまうのはもったいないから。それに子どもたちの喜ぶ顔も見たいですし」

「僕、子どもの頃、貴方のお店にお菓子をよく買いに来ていたんです。」

「ただお菓子を買っただけじゃなくて、落ち込んでいた時とか貴方にいろいろ励ましてもらいました」

「そうですね、それは嬉しいねえ。でも、お店がなくなってしまつてごめんなさいね」

「いえ、あの……」

「私もお菓子をもらつてもいいですか……」

「ええ、もちろんいいですよ。どうぞ駄菓子です」

「ありがとうございます。いただきます。」

「あつ、隆ちゃん。今日は野球の練習はどうだったの？」

私の横にいた男の子におばあちゃんが小さなチョコを渡して話しかけた。

「野球、止めようかなあつて思うんだ」

「どうしてだい？」

「もう、つまらなくなつちやつたんだ。野球」

「あんなに好きだったのに？ほかに好きなものでも出来たのかい？」

「いや、なんにも無いんだけど……」

「隆君、自分の好きなことがないなんてそっちの方がつまらないんじゃないかって、おばあちゃんは思うんだけどねえ」

「おばあちゃんはみんなにお菓子を食べてもらうのが好きだから、いつも楽しいんだよ」

「うーん……」

そう言つと隆君と呼ばれていた子どもは走り去つていった。

私は子どもの頃、駄菓子屋のおばあちゃんと話したあの時の暖かい気持ちと同じようなものを感じた。

三カ月後、私はおばあちゃんがお菓子を配っていた場所に車を止めて、ある準備をしていた。カラフルな車体のワゴンの後ろのドアを一番上まで開けて、車の中から楽しそうな音楽が響かせる。

何が始まるんだろう？近所の子どもたちが集まってきた。

その中にヘルメットをかぶり、グローブの隙間に金属バットを通し肩にかけている男の子がいた。土で汚れたユニフォームを着た彼はあのときの男の子に間違いなかった。

「隆君、おじさんのこと覚えてる？」

「えっ、知らない」

「そうか……」

「野球は好きかい？」

「うん！大好き！」

私は心の中に温かいものが流れ、すがすがしい気持ちになった。

そして深呼吸をして、満面の笑顔で、集まってきた子供たちに向かって言った。

「さあ、今日から開店だよ。お菓子の移動販売だ。」

おばあちゃん、おばあちゃんの言うとおり、自分の好きなことがないなんてつまらないよね。少し形は違うけど、自分の好きなことをもう一度、やってみようと思うよ。

静まり返った商店街に一人の大人と子どもたちの楽しそうな顔が光っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1018s/>

---

お菓子

2011年6月5日11時25分発行